

神奈川

神奈川県の江ノ島電鉄（藤沢～鎌倉間、約10.0キロ）と台湾鐵路管理局（略称・台鉄）の平溪線（三貂嶺～菁桐間、約12.9キロ）が、「観光連携協定」を締結した。来年3月末までの予定で、それぞれの使用済み一日乗車券を持参した乗客に相手方の新しい一日乗車券を無償提供する「共同送客」サービスを開催し、鉄道ファンらから喜ばれている。

江ノ電（江ノ島電鉄の愛称）は、大手私鉄の小田急電鉄系列のローカル鉄道。1902年に藤沢～片瀬（現・江ノ島）間で開業し、10年に小町（現・鎌倉）までの全線が開通した。戦後、モータリゼーションの進展で乗客数が落ち込んだが、定時運行の利点や「湘南らしさ」が見直されて人気が復活。路面電車のような「併用軌道」区間は、映画やテレビドラマにも度々登場し、代表的な沿線風景となっている。

平溪線は、台鉄が管轄する6つのローカル線のうちの1つで、1921年に石炭輸送を目的に開業。基隆川の中流沿いを走り、車窓からゆったりと溪谷美を堪能できる。実質的な始発駅の瑞芳からは、映画「悲情城市」のロケ地やアニメ「千と千尋の神隠し」の舞台のモデルになった九份行きのバスが出ている。沿線最大の街、平溪では熱気球を飛ばす「天燈祭」（旧暦1月15日前後）が行われる。

平溪線沿線の中程にある十分駅の近くには、商店街が線路際までせり出した場所があり、軒先をかすめて列車が走る様子は、江ノ電の江ノ島～腰越駅付近を彷彿させる。運行間隔は1時間に1本程度なので、列車が来ない時間帯には、観光客らが軌道敷きで天燈に願いごとを書き、空に放つ姿が見られる。

江ノ電の観光企画部によると、昨年、歴史的な観光資源に関する台湾の学術団体「台湾歴史資源経理学会」に招かれたのを機に、両鉄道の交流がスタート。ともに、それぞれの国の首都近郊に立地し、沿線に著名な観光地を抱えるローカル鉄道であることから、今年4月に協定締結が実現した。江ノ電は2009年、京都の京福電気鉄道と姉妹提携しているが、海外の鉄道との提携は初めて。

「共同送客」サービスは、江ノ電の使用済み一日乗車券「のりおりくん」（580円）を台鉄の台北駅から瑞芳駅までを持参すると、平溪線の一日周遊券（52元＝



江ノ電と「観光連携協定」を締結した台鉄の平溪線＝十分駅付近

日台の鉄道が「観光連携」 使用済み乗車券を相互利用

約200円）が無償提供される。反対に、平溪線の使用済み一日周遊券を江ノ電の藤沢、江ノ島、鎌倉の各駅に持参すると、江ノ電の「のりおりくん」が無償提供される。

日台の物価の違いや為替レートの関係で、台湾側に「有利」な協定となっているが、両鉄道は「互恵的な観光連携」を構築するとともに、双方の沿線エリアの観光需要を増大させるのが狙いとして、細かいことにはこだわらない考え。江ノ電の観光企画部は「親日的な人が多い台湾から来た観光客に、さらに良いイメージを持ってもらえれば」と話している。

同部によると、江ノ電では5月1日から7月31日までに、平溪線の使用済み一日周遊券約800枚が「のりおりくん」と交換された。一方、平溪線で交換された「のりおりくん」の枚数は未集計だが、日本の新聞各紙や月刊「台湾観光」日本語版（発行・台湾観光協会）などで両鉄道の協定締結が紹介されたので、今後増えることが期待されるという。

台鉄は日本統治時代の日本製の蒸気機関車（SL）を保存・運行し、類似のSLを持つJR北海道と「姉妹列車提携」を締結。また、台湾の阿里山森林鐵路は、日本の大井川鉄道（静岡県）や黒部峡谷鉄道（富山県）とそれぞれ姉妹提携している。しかし、江ノ電と平溪線のように運賃の“融通”にまで踏み込んだ提携は、これまでなかった。「共同送客」サービスは、好評ならば延長も検討するという。